



自転車を通じて一家団樂
ロードバイクで絆を深める仲良し家族

平尾さん一家

平尾達彦さん(52)
美枝さん(50)
彩乃さん(14)

Hamamatsu
Cyclist
Interview



父・達彦さんは家族の意見を聞きながらサイクルプランを決めたり、リビングでバンク修理講座までするそう。

ロードバイクという共通の趣味を持つ平尾一家。暇を見つけては3人でツーリングに出かける自転車一家を訪ねた。

自転車を始めたいきっかけは？

(父・達彦さん)7年前、糖尿病を患ってしまい、体質改善のために始めました。最初はジョギングに励んでいたのですが膝を傷めてしまい、それに変わるスポーツとしてロードバイクを選びました。当時100kgを超える体重でしたが、約4カ月で25kgの減量に成功。血糖値も下がりに、薬を使わずに糖尿病を克服しました。

(娘・彩乃さん)私が美術部所属だったからか、学級担任に体力づくりを勧められました。スポーツを始めるならと父から

ロードバイクを提案されました。自転車の乗り始めに転んだり坂道が辛かったりした思いはアニメ「弱虫ペダル」を見て、3人で盛り上がることで乗り越えることができました。

(母・美枝さん)娘はもうすぐ高校生。一緒に遊べる時期は意外と短いかもしれないと思い、同じ時間を共有するために、私もロードバイクを始めました。ロードバイクに乗ってみたい感想は？

(娘)今まで、三輪車にすら乗ったことがなかったのでも、とても怖かったです。最初は転んでばかりでした。

(母)娘は乗れるようになるのは早かったですよ。一般的な自転車を知らないから、癖も固定観念もなく、ロードバイクをすん

浜松で見つけた！

サイクリングに
HAMAった人たち

自転車は老若男女問わず楽しめるスポーツ。ときに家族のコミュニケーションツールになり、冒険アイテムになる。自転車を人生の相棒とし、サイクルライフを楽しむ人々にその魅力を伺った。

なり受け入れられたのでしょね。私はママチャリに慣れてしまっているのでも、初めてロードバイクに乗ったときは変速(ギア)の数が多く、漕いだ感覚がないほどの軽さに驚きました。なかなか慣れなかったです。(父)でも娘も妻もすぐに公道で悠々と走れるようになりましたね。私も自分が習得したスキルを家族に教えることができてるうれしいです。今では雨の日でも走りたいと、部屋にローラー台を並べて走るほど、家族全員が自転車にはまっています。自転車のノウハウを教えてくれたミノノイサイクルさんには感謝しています。

次から次へと走りたい場所を出し合い、盛り上がる3人。毎日の食卓でもロードバイクの話で花を咲かせているそう。自転車が共通の趣味になってから、会話が増え、毎日が楽しくなったという平尾一家。家族の絆を深めてくれる自転車の魅力をたくさん語っていた。



カモメの大群に出会える佐久米駅にて、ナイスショット！

※1 取材を実施した2019年10月時点

藤田
帆之介くん
(12歳)

ふじたばんのすけ



【左】旅の荷物15kgの負荷に耐えながら、富士山五合目に向かう。【右】登頂したときは、震えるほどの達成感！思わず叫んでしまったという帆之介くん。

毎年夏、浜松から新潟県の糸魚川まで(太平洋から日本海まで)を暑さと睡魔と戦いながら夜通しペダルをこぎ続ける、成長サイクリスト安川康男さん。今年の夏も完走し、これで25回目となる。自転車を始めたのは58年前、19歳のとき。当時ではまだ珍しいドロップハンドルの自転車を見かけ一目惚れ。初心者にも関わらず「せっかくなら一生モノを」と、給料の3倍もする自転車をオーダーメイドで購入。今でもメンテナンスをし続け、愛用している。



「浜松～糸魚川サイバルツアー」は、浜松の自転車屋イチャサイクルセンターが企画するイベントだ。

イクリストとしても活躍、先頭スタッフとして2003年(第1回)から参加。今回の第17回でも走る予定だ。まさに自転車漬けの人生を送る安川さん。「自転車は人生をより豊かにしてくれるもの。ストレス解消になるし、何より『楽しい』ということが心にも体にも最高に良い。自転車は筋力や体力のパロメーターになるので、体のメンテナンスにも役立つんです」と語る。「目標は100歳になっても糸魚川まで走り続けること」と冗談めかすも瞳の奥は真剣そのもの。まだまだ自転車への情熱は冷めそうにない。

2019年の夏、自転車冒険家の西川昌徳さんが企画した、自転車旅にチャレンジした藤田帆之介くん。全国から集まった小学生5人とともに、大阪の天保山から富士山を目指すというものだ。帆之介くんは浜名湖一周の経験があり、日常的に自転車を走らせてはいるものの、走行距離750kmへの挑戦はもちろん初めて。どんなことが待ち受けているのか想像もつかなかった。旅には西川さんと看護師が同行するが、基本は見守るだけ。初日は、1日40kmほどしか走れなかった子どもたちだが、日を追うごとに距離を延ばし、静岡県入りしたときは新居関所から静岡市までの115kmを1日で走り切っていた。2週間の旅は、食事も自

炊。宿で寝たのはたったの2回、入浴は3回。その他は河川敷などで野宿し、水浴びは川で済ませた。コース上で一番過酷だったのは富士山五合目までの登坂。五合目からは徒歩で山頂を目指し、見事ゴールした。「お父さんのすすめで参加したが、正直はじめは嫌だった。トラックを隣に国道を走るのも怖かったし、台風の中ずぶ濡れで走ったこともあった。でも楽しかった！チャレンジして本当に良かった」と目を輝かせる帆之介くん。自転車旅を通して、身についた強い精神力と自分で解決する力、仲間を思いやる心、そして達成感。つらさ以上に得られたものは大きい。彼にとってこの旅はこれからの人生の糧になるに違いない。



24時間で410km
浜松から糸魚川まで完走する
77歳の現役サイクリスト

安川
康男さん
(77歳)

やすかわ やすお